

## 医術・芸術・文芸と 顔とこころ、 からだと精神について

西原 克成

東京大学医学部口腔外科 講師



### 著者略歴

にしはら かつなり  
西原 克成

昭和46年東京大学大学院(医)修了。同年学位受領(医博)。現在、東京大学医学部口腔外科講師。科学技術庁無機材研客員研究官、順天堂大学形成外科、北海道大学歯学部、九州大学歯学部大学院、広島大学工学部大学院非常勤講師。

顎顔面バイオメカニクス学会理事、日本バイオマテリアル学会評議員、日本口腔インプラント学会評議員、日本人工臓器学会員、日本機械学会員。

第32回日本人工臓器学会にて、人工骨髄造血巢の誘導の研究でオリジナル賞1位受賞。

[研究分野]口腔科臨床医学、バイオメカニクス、免疫工学。実験進化学手法により人工骨髄、人工肝臓、人工脾臓の開発に従事。

[著書]生物は重力が進化させた(講談社ブルーバックス)、顔の科学(日本教文社)、呼吸健康術(法研)

### 1. 芸術と医術と文芸

“Ars longa, vita brevis”「医術の道は遠く人生は短い」という Hippocrates の言葉は、芸術の道としてもしばしば用いられる。芸術と医術は実際によく似ていて、ともに個人の全人格と切っても切れない思想・精神・洞察力・推察力・判断力・直観力の渾然一体となった技によって術が施される。生命の躍動するところを音や造形で表現するのが芸術である。体の動きで表すのが舞踊やスポーツであり、生き様の軌跡を記したり、感動のこころを言葉で表現したものが文芸である。

これに対して医術は、解析不能なほどに複雑な生活様式を持つ個々人の患者の生き方の中から、思いもよらない行動や習癖がわけのわからない病気の原因であることを見つけ、病的状態を治療し回復させることに生命の躍動感を覚える人々の仕事である。つまり治すことが術者の感動となり喜びとなる職種なのである。こころの源は感動にある。感動とは外界を感じてこころが動くことで、何が何を感じるかと言え、腸管内臓系が外界にある食物と生殖の場を感知してこれを求め、腸管内臓系を体壁筋によって移動することにはじまる。つまり腸管内臓系が感じその結果体を移動させるというのがこころのはじまりである。このことからこころの源が腸管内臓系にあることが明らかである。

今日のある種の免疫病の治療では、診断がついても二律背反の処置法しかないようなものもある。白血病細胞を制したついでに正常骨髄造血巢を回復不能に陥し入れてしまうような処置法のことである。その意味では、1830年代の医学の中心で活躍した

ウィーンの Josef Skoda の diagnostischer Nihilismus に似ている。これは、「内科医の目的は治すことではなくて、正しい診断をつけて剖検によってこれを検証することである」とするもので当時の医学界から厳しく糾弾された。主義で自然科学はできないことを進化の項で述べたが、医学は社会性の強い応用科学であるから医療には主義が入りやすい。しかし生命を生かしたり病気を治すことを本義とする医学にニヒリズムはなじまない。医学で主義が通用するのはヒューマンイズムだけであろう。

今日ではサイエンスと文学、スポーツと芸術など文化活動が混乱して訳がわからなくなってしまうている。たとえば「免疫の意味論」や「唯脳論」なる文学をサイエンスと誤解している医学者がいる。ヒトは何を論じようと勝手だが、これをサイエンスにするには学問のヒエラルヒーである「学・術・論・法」の厳密なサイエンスの技法と手続きを必要とする。くしくも Goethe が「我々は自然科学者 (Naturforscher) としては汎神論者、詩人としては多神論者、道徳的には一神論者である」と述べている。この観点からすれば「論」をサイエンスと誤解しているこれらの著者にとっては、彼らの文学作品が彼らのいう科学という名の宗教に対する信仰告白と見ることができる。

今日の免疫病治療学では、あらゆる免疫病の原因療法が存在しないと考えられているらしく、ほとんどが対症療法である。今日免疫疾患にもそれぞれ専門医はいるが、基本的な免疫病は治せない対症療法のための専門医である。これは何を意味するかというと専門の病気を治せなくても裁判で敗訴にならないための専門医ということである。これは免疫病の原因が完全に不明とされてい

るからである。ここで、こころと精神と肉体と魂の関係をある程度サイエンスして明確にしておかないことには、いたずらに生命科学が混乱する。それで治すためのライフサイエンスである医学が今日駄目になってしまっているのである。

プロレタリア文学なるものがある。生命の躍動するところの軌跡つまり生活歴を記すのが文学だとすれば、これは二律背反である。なんとなれば、共産主義思想というのは生命存立の基盤に抵触する思想で、生命の躍動するところが必ず失われるからである。生命体とは、リモデリングに共役したエネルギーの渦であり、したがって時間と空間とエネルギー源とを生命体そのものが占有しないかぎり存立できないからである。このどれ1つとして共有できるものが存在しないのが生命体である。この一角を犯せば、生命の躍動感はただちに失われる。共有を強要する法を握る者は、必ず共同体内部の殺戮を始める。ロベスピエール、ナポレオン、レーニン、トロツキー、スターリン、ヒットラー、マオ、今次大戦のわが国の指導者らは、まず手始めに自国民の自由を奪う。自由主義革命、共産主義・社会主義、国家社会主義、軍国主義を問わず、自由空間におけるエネルギーと時間の占有を暴力的に犯す力は思いもよらない惨憺たる結末しかもたらさない。これらの暴力思想は重度の免疫病におかされた指導者によって生み出されたと見てよい。これはどんな古代国家よりも陰惨な大量殺戮と難民を生み出した。

免疫病には必ず原因がある。原因がなければ病気は起こらない。原因の見落としが世界中の医学で当然のこととなってしまった。自己非自己の免疫学では原因が初めか

ら迷宮とされ、誰一人原因を考えようとしていない医者が普通となってしまった。Skodaが患者を治すことを二の次にし Autopsy を急いだように、今の医学は免疫病患者の体そのものをほとんど診察しないで検査データのみを重視し、治すことよりは診断することのみに喜びを覚えているらしい。

今日の日本では、何のために勉強し、何のために仕事をするのかが、ともすると忘れられて、明らかに本末が転倒している。勉強も仕事も個人の生命をより生き生きとさせるためにするはずのものであるが、わが国では、勉強や仕事に引きずられて個人の命がないがしろにされている。それで過労死や子供の登校拒否などの問題が発生するのである。骨休めを怠るだけで免疫病が生ずるという医学常識が失われてしまっており、まるで超能力を追求するような無理な生活を医者までが率先して続けている。生命の躍動感のある生活は、十分なる睡眠と十分に咀嚼を行うゆったりした食事と横隔膜と鼻腔による充実した呼吸の三つ揃いではじめて得られるのである。早々に、我々日本人の手で西洋医学と東洋医学を統合し正しいライフサイエンスを復活させ、生命の躍動感が蘇った生活を一人ひとりが自分の力で考えて取り戻さなければならない時期が来ている。生き生きした生活はまず顔に表れる。顔にところが表明されるからである。進化と免疫が混迷している現在のライフサイエンスでは、こころと顔と精神とからだの関係もやはり混乱している。

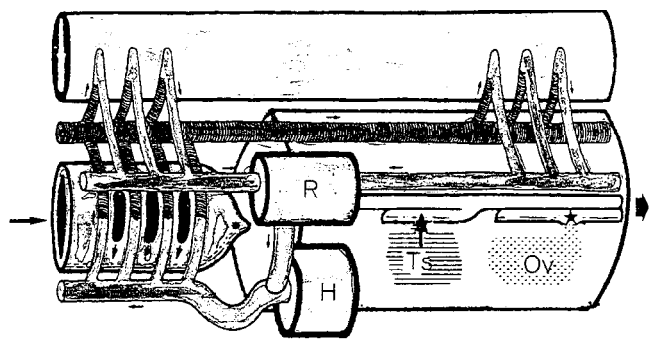
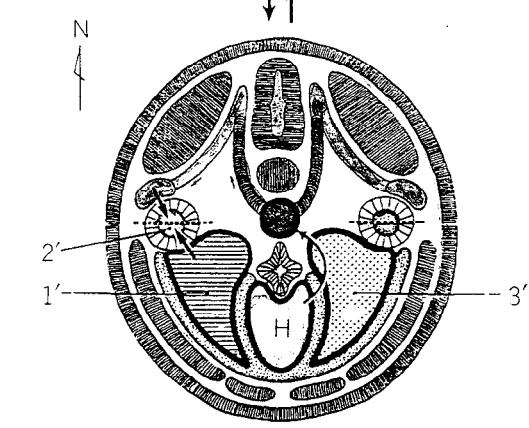
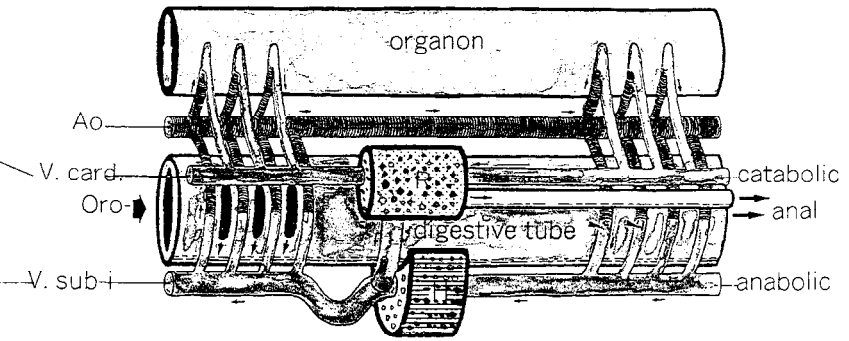
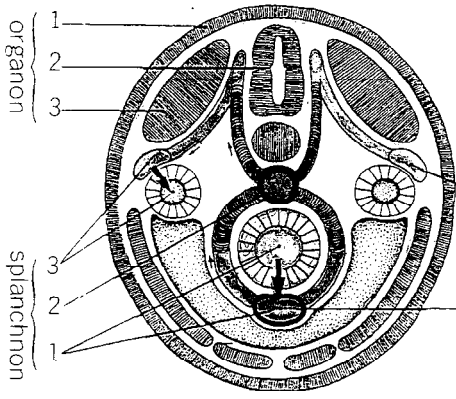
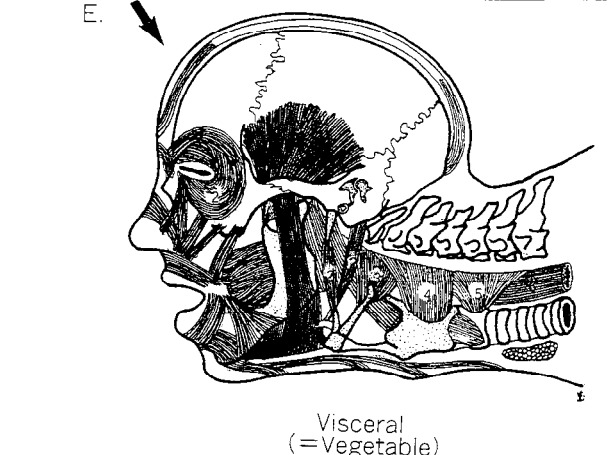
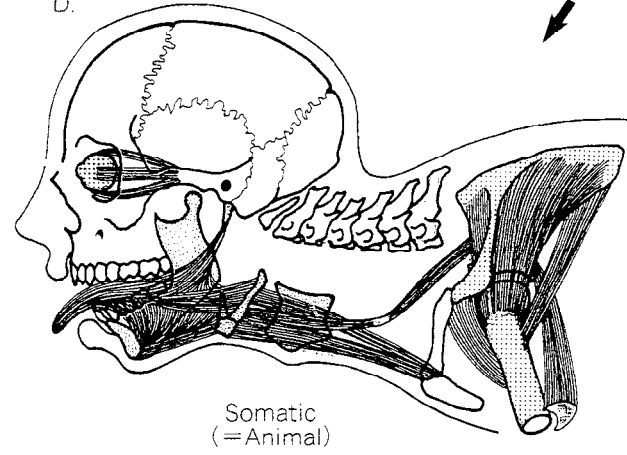
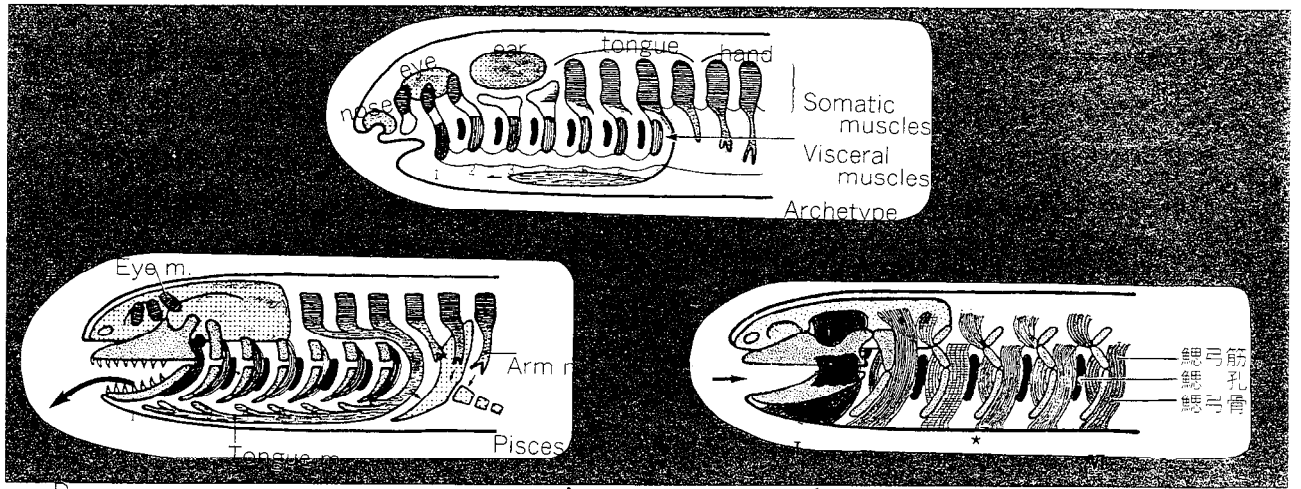
## 2. 顔とこころ

顔は解剖学用語では内臓頭蓋と呼ばれるように、原始脊椎動物の鰓腸という内臓の腸管に大半の機能部分が由来する。鰓腸と

は呼吸をつかさどる鰓と呼ばれる腸管のことであるから、当然平滑筋と呼吸用の粘膜が一体となったものである。顔の筋肉は、表情筋群や咀嚼筋群と呼ばれる色々な種類の筋肉でできており、喜怒哀楽といったところの有り様を、これらの筋肉によって顔に表したり、ものを食べる時にかみ砕くのに使ったりする。これらの筋肉が実はエラの腸の平滑筋に由来する(図1)。

こころというのは一体何なのであろうか？今は下火になったが、一時唯脳論なるものの考え方がはやったので、こころは脳の機能であると信じているものが多い。しかし洋の東西を問わず、こころは心臓で代表される内臓感覚系に基礎をおき、精神の座が脳にあるというのが生命科学の常識である。昔から、こころが痛むときは内臓に症状が表れることを知っていた。陽の表現では、胸を弾ませる、胸がうきうきする、胸が高鳴る、胸躍らせるなどところの浮き立つ様を表すが、これは心臓の高鳴りのことである。陰の表現では、胸騒ぎ、胸を搔きむしる、胸が張り裂ける、腹が立つ、断腸の思い、などと言い、心臓や腸のあえぐ様を表現する。

中国には宦官という制度があったが、内臓の一部を取ってしまうと、取る前とはこころが全く変わってしまうという。通常は、心は顔に表れる。仏教でいう五欲は、財、名、色、食、睡であるが、これは脳の要求する欲ではなくて、すべて内臓腸管系の欲なのである。それで財産争いが説得不能であり、名誉欲を押さえることが、通常説得不可能なのである。唯脳論で行けば埋詰めですぐに納得するはずであるが、所有の欲は、内臓腸管感覚であるからどうすることもできない。それでこの世の中には理性に



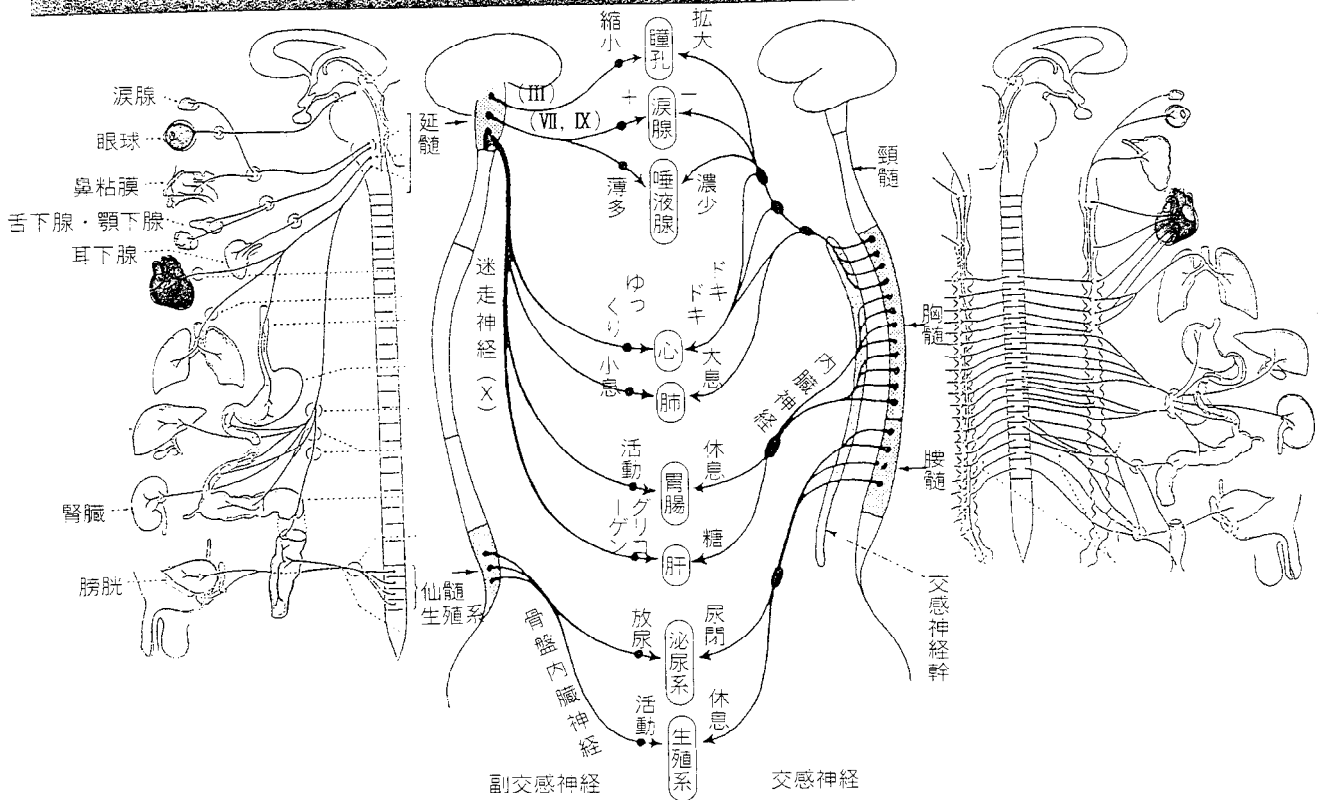
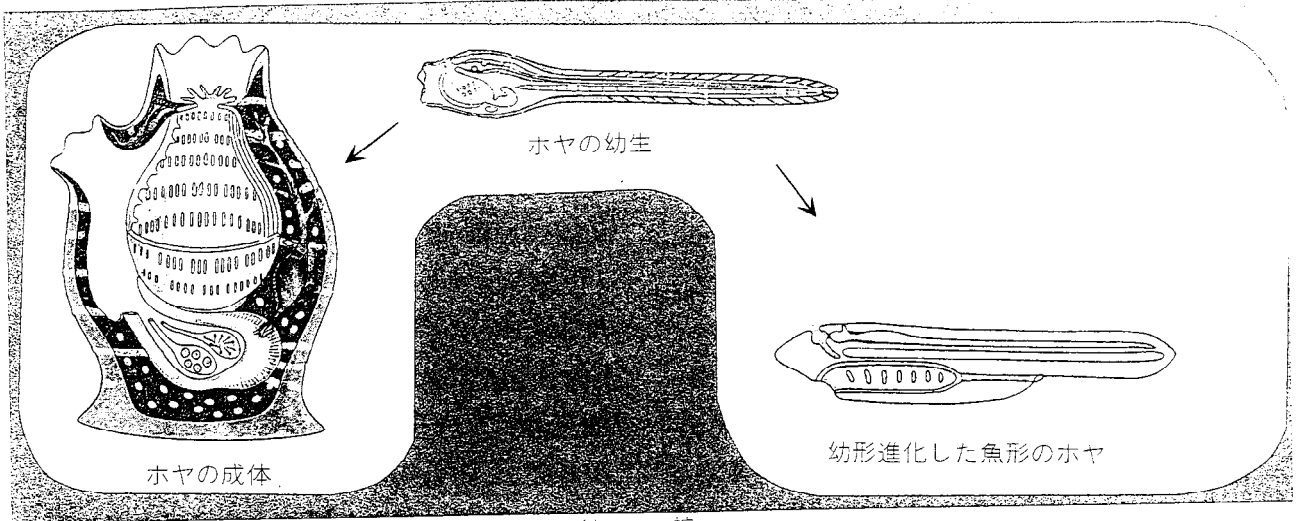


図 3

図 1 内臓頭蓋の筋肉の由来 (三木成夫原図)

- A : サメの胎児の内臓筋と体壁筋。
- B : サメの鰓腸平滑筋と横紋筋の発生。体壁横紋筋から舌とヒレの筋肉の形成が始まる。
- C : サメの鰓弓筋 (鰓腸平滑筋群)。
- D : ヒトの頭頸部の体節横紋筋 (体壁筋), 主に精神活動を表明する筋肉。
- E : ヒトの内臓筋由来の表情筋群, 咀嚼筋群, 嚥下筋群, 発声筋群が鰓腸筋に由来することを示す。これらの筋群は, 主としてこころを表明する。

図 2 ヤツメウナギの食の相 (上) と殖の相 (下) のシェーマ (三木成夫原図)

図 3 副交感神経系と交感神経系 (三木成夫・Larsell 改変)

副交感神経系の方が, ホヤの固着性の体制を示し, 口・肛の二極の内臓脳に相当する。幼形進化して魚形となった時に発達するのが交感神経系で内臓と体壁筋を連繋する (臓器は背側より見ている)。

よって法律を作っても、法で律することができないで、事件が絶えないのである。一般に「唯」のつくものは唯物論、唯心論、唯脳論、唯臓論、唯我独尊と皆正しくない。脳と腸は切っても切れない関係にある。脳と腸が共軛してできており、共軛して機能するからである。

表情筋は前述のごとく呼吸の鰓腸筋に由来し、神経は顔面神経に支配されている。食べる時の咬む筋肉も鰓腸筋に由来するが、由来する体節が顔面表情筋とは異なり、三叉神経に支配されている。この顔面神経と三叉神経は、迷走神経と同系の内臓神経なのである。鰓という字をよく考えてみよう。昔の中国人は、大脳辺縁系思考により字を作ったらしい。この字は魚偏に思うという字でできているが『思』の『田』は頭を輪切りにした図を示し脳のことであり、『心』は『心の臓』のことで内臓である。つまり『思う』という字は脳の作用である精神と内臓の作用である心が合わさったもので、感情表明のことである。昔の哲人は、魚を心眼で観察して、彼らが鰓で喜怒哀楽を表明していることを観得したらしい。脳の精神 (Geist) と内臓の心 (Herz) と体壁系の肉体の合体した生命体そのものが魂 (Seele) を持った生きものである。魂は、腸管と脳と体の三者を備えた生命体にはすべて備わっている。心臓という内臓の活動が停止して体壁と脳の共軛した精神と、脳と腸管の共軛した心の機能が止まり魂が遊離した肉体をなきがらという。

脊椎動物の始まりのホヤでは、心臓は鰓の運動につられて動いた脈管である。つまり呼吸の運動が最も重要な腸管内臓運動でこころを代表する心臓の動きを主導したのである。こころが張り裂けるばかりに動転

すると息が止まりしばしば心筋梗塞がおこるのはこのためである。この原初の呼吸筋がヒトでは顔の表情筋・咀嚼筋・嚥下、発声筋に変容している。

これで鰓が感情を示す内臓の心臓腸管系の上位器官であり内臓感覚の効果表明器官であることが明らかとなった。この鰓腸の運動が呼吸運動である。鰓器は同時に原始脊椎動物では造血器 (赤血球、白血球、リンパ球) と内分泌器を兼ねる。上陸という脊椎動物の第二革命を経験した高等動物は、この鰓腸が水性の呼吸を失ったために全く別の肺と内分泌器・白血球造血器 (扁桃) などに変容した。肺呼吸は腹直筋、広背筋、胸筋などの体壁系横紋筋によって行われる。鰓運動を横紋筋が引き継いだ訳である。それで陽の呼吸の笑いでは腹を抱えて笑うのである。陰の呼吸では胸がつかえたように悲嘆し、腹をよじって嘆き悲しむ。系統発生をさかのぼると原索類に至り脳下垂体も腎臓、副腎もすべて鰓腸部に収斂する。したがって笑いで顔面表情筋や呼吸が活性化され、横隔膜が喜々として運動すれば副腎と脳下垂体が喜んで生き生きと活性化されるのである。

生命の要を制する内分泌器や脈管の臓器はほとんどすべて鰓器と近縁の器官である。近縁とは由来が同じか由来が近い関係にある器官のことである。由来の同じ器官は相同器官と呼ばれる。脊椎動物の起源をたどるとホヤに行き着くから、エラのある嚢に生命の営みのすべてが存在したのである。これが幼形進化して口肛の二極に分離したのが高等脊椎動物である。主要内分泌器は鰓器と生殖器に由来する。生命体そのものが嚢状であったから、ほとんどすべての臓器が近縁ということになる。ホヤの生殖は嗅

器が機能・効果器であるが、ほとんどの哺乳類も嗅器が同様の働きをする。ヒトは嗅覚が極端に衰えて、生殖系の嗅覚機能の代行を視覚が行う。それでポルノグラフィ産業が栄えるのである。生殖は余った栄養の放出による次代に及ぶモデリングであるから、腸管の機能である。尿管が栄養老廃の不要産物であり、同様に腸管の機能である。

心は内臓感覚の表れである。系統発生的に言えば、少なくとも『内臓』をもつ生物はすべて心をもっている。人間でいうと、所有欲・名誉欲・色欲・食欲・睡眠欲というような『本能』といわれるものが、『内臓感覚』とこれに近接した古い体壁感覚にその根源をおいているからである。もとよりここから発する『情動系情報』は、脳幹と大脳辺縁系で統合され、さらに大脳新皮質に脈絡をもつ。「脳のみが心ではない」訳で、脳は情報の集積回路である。必ずしも脳が心の『ありよう』を決める訳ではない。特に感情の場合は、内臓から発信された情動系情報が、大脳辺縁系でキャッチされ、それが脳の新皮質に伝えられ、それが心の表現として身体を動かす。『情動』の基礎となる情報の発信器は、心の依って立つ臓器に求められる。それはつまり腸管内臓系である。内臓感覚は、人間の精神活動にとって、大きなウェイトを占めている。この『内臓感覚』と『原始体感系』を担当する「内臓脳」が、同時に『精神の基盤』となる『思考の機能』を兼務しているのである。内臓脳はどんな動物にも存在する大脳辺縁系で、哺乳類では片隅（辺縁）に押しやられているが、爬虫類以下では脳を中心に位置する。脳は内臓とその器官の発するホルモンの直接の影響下で機能している。したがって、内臓と身体から発する『快・不快』が、精神

のありように大きく関わっている。

### 3. 精神・心ころと2つの内臓脳 (副交感神経系)

原始脊椎動物では鰓が感情の表明の器官であることを述べたが、心は鰓器の内分泌系に作用し、それによって体全体を体液性にコントロールする。体壁系の脳の機能を通常精神と呼び、身体活動と結び付いて理性の源となる。これを陰で支えるのが内臓脳である。大半の内分泌は鰓器と生殖器に由来する。実はこころの源がこの2種類の腸にあり、2つの腸の考えるニューロンが内臓脳である。脊椎動物の原始体制をヤツメウナギにみることができる。このものは、かっちりとした食の相と殖の相に二分される。食すなわち養う相では、はちきれんばかりに腸管が栄養の食物で満たされる。この栄養が生殖物質に改造される頃に殖の相にスイッチ変換されると、腸管が文字通り無くなって卵子と精子で満たされた腹に変わり、一切食物を食わなくなる(図2)。はち切れそうになると肛側の脳のスイッチが入り、生殖物質が放出され、個体の死が間もなく訪れる。放出の引き金は嗅覚が担当する。

神経としてはおおまかに言えば三叉神経、顔面・舌咽神経、副交感神経の迷走・副神経および骨盤内臓神経である。副交感神経の分布が、口・肛の二極に分かれているということは腸が2つの中心(脳)を持つということである。前者が精神性の強いこころの源であり、後者が情欲のこころの源である。この神経はホヤの固着性の体制の主な作動神経で、交感神経よりもはるかに古いシステムである(図3)。腸管内臓系と体壁系を結ぶ神経が交感神経で、考える部分すなわちニューロンは脳脊髄にある。昔か

ら仏教でいわれる五欲の財・名・色・食・睡は、大別して所有・生存と生殖の二系統に分けられる。色欲と名誉欲・支配欲が共通で、生殖系内臓機能に属し、財・食・睡は所有・生存欲の消化系内臓腸管機能に属する。この両者は、同じ腸管でありながら相反する関係にある。消化系は空になると要求の引き金が引かれる。泌尿・生殖・排出系は、余った栄養の生植物質と血液の不要浸透物（尿）と消化残渣物が満ちて来ると排出のサインが出る。このサインは両者ともうずきの如き苦痛として表わされる。

生命体には本来目的は無いが、強いて生命の意義を求めれば、摂食、消化、代謝、つまり生命の渦の廻転と再生つまり生殖である。この2つに対応した脳が原初の体制から備わっている。腸は考えるシステム(藤田恒夫)で、古い神経系の副交感神経の中樞は、太古の二極化した脳と見られる。この脳は内臓の機能をつかさどる。つまりここでは腸管の作用であり、このものの本義は摂食、消化、呼吸と不要物や余剰物の排出であるから、脳と腸の一体となった複合機能を持つところは常に消化管と泌尿・生殖系腸管の有り様に従って変動する。空腹で怒りっぽくなったり、発情すると目の色が変わりヒトが変わるのはこの故である。相当な政治家や学者が色情に走るのもこの腸管の肛側の脳(頭)の故で、頭側の鰓腸の脳(頭)が下の脳を制御できないためである。一般に肛側の内臓感覚の発するところを劣情と呼ぶが、これが存在しないと子孫は残らなくなる。魚では鰓器が感情を表すが、ヒトではこの鰓器の筋肉が顔面の表情筋と咀嚼、嚥下、発声の筋肉に変容している。したがって顔とところは切っても切れない関係にある。顔すなわち内臓頭蓋という器官のも

つ機能の表明が心ということである。

#### 4. 肛側の内臓脳とところ

生命の躍動するところを音や造形で表現するのが芸術である。芸術の源は感動にある。揺れ動くところの様を表現するのが文学である。文学もその源を感動におく。萩原朔太郎は『ところ』と題して、

ところを何にたとえん

ところは紫陽花の花

うす紫に咲く日はあれど

うす水色の思いでばかりがせんなくて、ところがうつろいやすいことを歌っている。ところが何によってうつろうのかと言えば、腸管の有り様によって変化するのだから意外である。

朔太郎の脊柱を形成しているのが蕪村である。『郷愁の詩人と謝蕪村』に「普我追悼の曲」を取り上げて蕪村のこのところを見ている。

君 あしたに去りぬ夕のこのちぢれ

何ぞはるかなる

に始まる曲は、時間の流れに従って、乱れるところの経過が岡の辺への情景に切々と歌われている。この世のなかで後楯となるヒトを失うほど心をいためるものはない。生存にかかわるところは口側の内臓脳(頭)の機能である。

辞世の句が

白梅に明るく夜ばかりとなりけり

であり、春をよんだ句に

おそき日のつもりて遠き昔かな

がある。蕪村は実にのどかな心で句をよみ、美事な絵を描く才能を持っていた。白身の死に臨んでもおだやかであった。このほかにも蕪村は江戸時代とはとても思えないような新体詩の先駆けのような歌曲を作っている。



これがそっくりそのまま明治時代の島崎藤村に受け継がれたような錯覚や、藤村よりも新しいスタイルのような錯覚すら覚えるほどである。

藤村もまたよくこころを歌った。

時は暮れ行く春よりぞ

また短きはなかるらむ

恨みは友の別れより

さらに長きはなかるらむ

や『千曲川旅情の歌』はあまりにも有名である。しかしあるとき、ぴたりと詩を作ることをやめてしまった。『まだ上げ始めし前髪の 林檎のもとに見えし時 前にさしたる花櫛の 花ある君と思ひけり』に始まり『やさしく白き手を延べて』と歌った当の少女が身ごもってしまったのである。そして惜別の歌を詠んでこの姪にあたる少女と別れ、人倫の支配するこの世の中に復帰するためにフランスに渡った。恋い焦がれのこのころの行き着く先は、悲惨なことが多い。詩は精神性の高いこのころの作用であり、恋い焦がれは、劣情と切り離せない内臓のうずきのこのころである。先に見た口・肛側の2つの腸管内臓脳の相剋である。多くの詩人がこの2つの脳の源となる腸管の相剋で苦しむ。詩人ゲーテも黄色いチョッキに紺の燕尾服といった、まるでゴッホの『アルルの星空』に見るような色彩感覚で若き日にこの相剋にもだえ、ついに生涯結婚することもなく、女中に手をつけたままで生涯を終わっている。

北原白秋も『から松の林を出でて から松の林に入りぬ から松は寂しかりけり 旅行くは寂しかりけり』と、こころを歌ったが、やはり隣家の人妻と道ならぬ仲になって、詩が色あせてしまった。

ヒトの世で生殖系の関連がこじれると、何

も死ななくてもいいのと思うのに大抵はヒトは死を選ぶ。多分これはヤツメウナギに代表される原始脊椎動物の生の二相に示される生殖の相の後に予定されている死の基本プログラムの生命記憶を、ヒトが今もって受け継いでいるためであろう。

ニーチェもシューベルトも肛側の内臓脳の疼きに起因する梅毒に罹ったために、その思想と音楽が悲惨さを帯びてしまった。

中原中也は「よごれちまった悲しみに 今日も小雪のふりかかる」と生殖系内臓感覚と、まだ目覚める前の純なこころとの相剋をなげき悲しんだあまりに、魂が壊れてしまった。太宰治も文学でほぼ中也と同じコースをたどって自己崩壊の道歩んだ。

## 5. 口側の内臓脳とこころ

太宰治は『我妻鏡』に基づいて『右大臣実朝』を著して、実朝のこころの様を記している。実朝は実によくこころのことを歌っている。

わが心いかんせよとかやまぶきの

うつろう花に嵐立つ見む

やまぶきは、万葉の高市の皇子の姉の十市の皇女への挽歌

やまぶきのさきよそいたる山清水

くみに行かめど道の知らなく

にあるように黄泉への手向けの花であり、花の中に嵐を見るのも穏やかではない心境を示している。

たまくしげ箱根のみうみけけれあれや

二国かけてなにかたゆとう

古い関東の言葉で『こころ』は『KÖKÖRÖ』に近い音で発音されることがあったと言われ、この歌のみが『けれ』になっている。

実朝のこころを悩ませたのは、生殖系内臓感覚に派生する恋い焦がれのこのころでは

無い。生存と権力，肉親に対する絶望から来る，食の相に属する内臓感覚に由来するところである。実朝は鴨長明に恋の歌は詠んではなりませぬ，とたしなめられている。

春ときて夏とすぐして秋風の

吹き上げの浜に冬は来にけり

という歌は彼が1年中何もすることが無かったことを嘆いている詠うでもある。彼はある時ぴたりと歌をよまなくなってしまった。源家の統領に当然所属するはずの権力をことごとく剝がされて，生命までも脅かされていた彼のところが，一貫して歌の背後から滲み出ている。考えて見れば頼朝が世界で最初に拓いた立憲君主制武断政権の幕府の実態は，平家の北条氏が源家の申し子を矢面に立たせたクーデターであった。源家の統領の亡き後は，直ちに北条家一門の独占工作が陰惨に始められ，頼朝の腹心の武将が1人また1人と着実に討たれていった。ついには，形ばかりであった將軍頼家(二代)が消された後に，その子の実朝の甥に当たる公暁に首を落とされたのが実朝であった。こうなることを幼少の時から予感して育った彼のところが，歌の背後に脱力感としてにじみ出ているのである。頼家もすなおに消されたわけではなかった。実の母親，政子の差し金でうるし風呂に入れられて危うく命を落とすところであった。頼家は，母親のあまりの仕打ちに，かぶれて死に損なってふくれ上がった顔を彫刻させて面として残している。実朝の詠んだ

物いはぬ四方のけだものすらだにも

哀れなるかな親の子を思う

の歌には，あきれ果てた惨い親への絶望と恨みがにじみ出ている。こういう状況から，彼のところの対象は生命の生存に対するものであったことがうかがえる。

こころの奥底は思想，言葉，歌とともに顔のかたちに表れる。このこころの源が内臓感覚にあり，これが脳幹網様体を通して大脳で統合され，再び内臓の鰓器に反映される。この鰓器に内分泌の主要部分があり，こころが内分泌をコントロールする。歌は声によるが，声帯は鰓弓筋の成れの果てである。また歌は理性と思想と感情と音声で詠まれるものである。ということは，理性も思想も感情もすべての源は内臓の喜怒哀楽に依存しているということである。こころは歌にあらわれ，声に出て，顔かたちに表れる。顔の機能(咀嚼・嚥下・発声・表情)をつかさどる大半の筋肉が鰓弓筋に由来するためである。口では舌筋群のみが体壁筋(頸直筋)に由来する。舌の動きは精神活動と連動する。のどから手を出すような舌の機能と，「ことば」が精神活動を示している(図1)。感動するとことばを失うのは，こころの表明が舌筋ではなくて声帯にあるからである。

こころと腸管と，精神と体壁系のからだの渾然一体となったものが魂を持ったいのちである。脳と内臓の機能の停止した肉体が魂のぬけたなきがらである。したがって魂がヒトにのみあると思うのは系統発生的に誤りである。

哺乳類に至って顔面頭蓋において鰓弓筋の機能が咀嚼・表情として復活する。爬虫類以下では嚥下と発声のほかは鰓弓筋の機能は発達しない。つまり冷血動物(両生類，爬虫類)にはこころを形に表明する器官が魚類よりも乏しいのである。顔は，こころと精神と肉体の統合された魂の機能・効果器官として人間で最もよく発達した器官であり，生命を代表する複合器官である。鰓孔を持った口の囊の顔の源のホヤが5億年

間の頭進（頭に向かってすすむこと）による力学対応の末にたどり着いた当然すぎるほど当然の顔の機能ということになるが、一方かたちとしては思いもよらない形態的結末ということになる。

## 6. 医術と学問

医師で文学者であった本居宣長や上田秋成は文学者として偉大であるから、本職の医業でも誤ることが無かったに違いない。偉大な文学者は大脳辺縁思考をするから、医術でも偉大であるはずである。それに対して、近代の医者で文学者であった森鷗外は、知識層に大変人気があるが、本業の医術では感性を欠いていた。自分の子供の病気の診断すら誤って早々にさじをなげたが、母親の手当と看病で生き返ってしまったという。また、自身が萎縮腎で生命を落としている。本職では彼の時代より400年近くも前にマゼランが航海中の脚気防止にビールを採用していたにもかかわらず、勉強不足と天性の感のにぶさから頑迷に脚気伝染病説をとらえた人だから、文学も当然浅薄な大脳皮質の産物であろう。明治の陸軍では医官として彼を一時小倉に左遷したが、正当な評価だったのであろう。日露戦後では脚気で多くの将兵を死なせた。鷗外を褒め称えたのは、かの駄目将軍で悪名高い乃木希典だけであったという。同病相あわれんだのかもしれない。軍事作戦も、また大脳辺縁系思考でなければ失敗する。乃木の参謀は、すべて秀才で揃えたから、ナポレオン軍を破った世界最強のロシア陸軍が新たに開発した機関銃とトーチカ（露語）を前に、駄目とわかっている戦法を何回も繰り返してしかばねをつんだ。児玉源太郎が見かねて、軍規をおかして指揮権を奪い長距

離砲で、わずか1日で203高地は陥落した。凡才つまり秀才は何をしても駄目なのである。その乃木希典も凡ような漢詩を沢山作っている。

天才的な医学者は軍事でもその才を發揮する。これが上医で、国を癒すと言われる所以である。明治建国の父大村益次郎は、医師村田蔵六時代に誰も手を出せないでいた人体解剖をこともなげに、見事な手さばきで完遂したという。軍事学でも天才の益次郎は討幕の総司令をこともなげにつとめ、初代の兵部大輔となったが、明治2年に薩摩の手で暗殺された。これでわが国も陸軍も大きく変質した。

脊椎動物は力学対応だけで5億年間進化をとげて来たが、この進化は当然環境変化に場当たりに対応した無目的なものである。この過程で人類はおおよそ4,500万年前にナックル歩行から直立二歩行に行動様式を変えて、手を歩行から解放し、同時にこの頃言葉を修得した。これにより一気に人類進化の奔流に入る。人類にほぼ特有のこの行動様式はきわ立った力学対応の結果、ヒトのみに特有の形と機能を生じはじめた。そして生活の周囲をこのヒトの行動様式に合わせてととのえはじめた。これが少しずつ蓄積して400万年くらい経つと文化・文明・社会として形をなす。この力学対応は、すべて無目的に進む。したがって、人類は至る所に構造欠陥を持つことになる。とりわけ人類の誇る知恵は欠陥だらけの知恵である。浅知恵でよかれと思ってやった（本当に思ったかどうかは不明だが）ロシア革命は、今日ロシアにおいてすら自国民にしかけた戦争としてしか総括されていない。ここが脳にあると思ったから、こんなことになってしまったのである。浅知恵でおご

り高ぶった人類は、もう一度謙虚に系統発生学と形態学を200年前の昔に立ち返って真剣に学びなおさなければならない時期にさしかかっている。そして人類の誇る文化・文明・科学が、生命体としてのいかなる機能の産物であるかを、再びギリシア時代の

頃の基本に立ち帰って深く考えなければならない時期に来ている。それ程までにおろかしいダーウィニズムやマルキシズム、免疫論、唯脳論がまるでサイエンスの如き顔をして人類文化の混乱をさらなる混迷へと誘って来たのである。

#### 参考文献

- 1) 三木成夫：生命形態学序説。うぶすな書院、東京、1993。
- 2) 藤田恒夫：腸は考える。岩波新書、東京、1996。
- 3) 西原克成：顔の科学。日本教文社、東京、1996。

## INFORMATION



### 国境なき医師団 (MSF) 参加医師、看護婦、助産婦募集

**概 要：**1971年にフランスで設立された緊急医療援助を目的とした国際的な民間援助団体です。現在年間2,500人以上のボランティアが世界各地で援助活動を行っています。

#### リクルートミーティングと個別面接のお知らせ

来る6月現在カンボジアの責任者でベルギー人医師のイヴ・コエットが来日し6月11日から16日まで滞在いたします。国境なき医師団ミッション参加を希望される医師、看護婦(士)のために、リクルート・ミーティングを予定しております。また、下記基準を満たし、今年中に参加を考えていらっしゃる方には個別面接をいたしますので希望される方は事前に事務局まで書類をご請求ください。

リクルート・ミーティング：6月13日(土) 14:00~15:30

- 個別面接選考基準：
1. 国家試験免許保持者で2年以上の実務経験があること
  2. 英語またはフランス語で意志の疎通がはかれる方
  3. 6ヵ月以上の海外派遣に参加できる方(外科の場合は6ヵ月以下も可)
  4. 今年中の派遣でも応じられる方(個別面接希望の方)

6月11日から16日までの6日間、日時に関しましては個別にご相談に応じます。面接ご希望の方は事務局、入井までご連絡下さい。

お問い合わせ先：国境なき医師団日本事務局：☎ 169-0075 東京都新宿区高田馬場3-28-1

☎ 03-3366-8571 FAX 03-3366-8573